

欧米への江戸幕府の眼差し －葵文庫の洋書を中心に－

岡部 幹彦

833部、2300冊余に及ぶ葵文庫の洋書は、明治以降の移管分を除くと、すべて幕府の複数の機関に所蔵されたものです。これらの機関のうち諸術調所と横浜仏語伝習所を除く機関の淵源に遡ると、それらはいずれも「蛮書和解御用」にその起源を有しています。そしてこの蛮書和解御用の最大の成果である『厚生新編』もまたこの葵文庫の貴重な蔵書です。今回のテーマは、葵文庫形成の出発点とも言える蛮書和解御用が何故に天文方に置かれることとなったのか。この点に焦点を当てることにします。

1. すべては《暦》から始まった

17世紀のわが国の暦は、中国の宣明暦を800年間も使い続けたために誤差の大きなものになっていました。そこで渋川春海が独自の暦法を編み出し、貞享元年（1684）に幕府がこれを採用して《貞享の改暦》が行なわれました。これを機に精度の高い暦を編むことを継続的に研究する目的で天文方が寺社奉行（後に若年寄）のもとに置かれたのです。一方、当時の中国の暦法は、イエズス会の宣教師たちによって中国にもたらされた西洋天文学を受容したものでした。わが国の民間の研究者も天文方も中国の暦法書を介して西洋天文学に触れることとなります。

西洋天文学を反映した中国の暦法書『暦算全書』の解説を8代将軍徳川吉宗が建部賢弘に命じたのもその少し後のことです。さらに吉宗は、天文方に西洋天文学に基づく改暦作業を命じたのです。こうして天文方は改暦を具体的な目標として西洋天文学と取り組むこととなります。この時点では依然として中国の暦書を通じてです。しかも残念なことに吉宗の意向に沿う改暦は、彼自身の逝去により実現されることなく、宝暦5年（1755）の《宝暦の改暦》となります。

その後幕府は、ティコ・ブラーエの理論を反映した徐光啓ら編纂の『崇禎暦書』に基づく暦の試作を寛政4年（1792）天文方に命じます。寛政7年『崇禎暦書』や『暦象考成後編』を研究していた間重富、高橋至時が招聘され、高橋至時が天文方となります。はじめて西洋天文学－ケプラーの楕円軌道論を含む－に基づいた《寛政の改暦》が寛政9年（1797）に行われます。

そして享和3年（1803）、若年寄堀田正敦は、高橋至時にフランスの天文学者ラランドの

天文書のオランダ語版『ラランデ暦書』の調査を命じました。ここに具体的かつ直接的に天文方が外国語文献を扱うことになったのです。乱暴な言い方になりますが、この『ラランデ暦書』の調査こそ後の蛮書和解御用へと発展する歩みの第一歩と言えるものです。

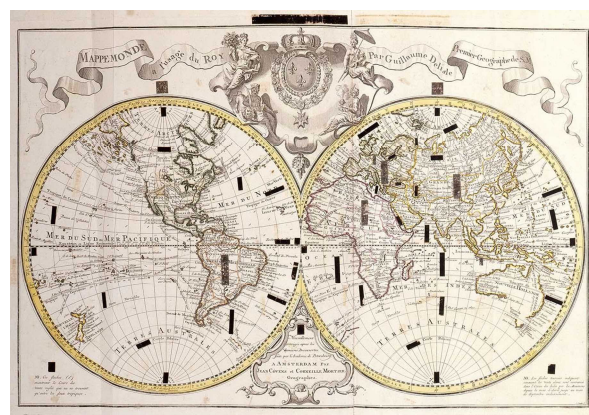
そもそも天文方の職務の中心は《暦》です。そして、これまで見たように幕府の西洋への眼差しもまた《改暦》という極めて重要な事業遂行のための必要性に迫られたものでした。こうして《暦》を軸とした天文方と蘭書・洋書との関係が成立したのです。ただし、この時点ではまだ蛮書和解御用は置かれていません。その誕生には天文方に係る新たにもうひとつの重要な課題が遂行されなければなりませんでした。

2. 地図の中の不思議な日本

もうひとつの重要な課題とは世界地図の作成です。この課題を成し遂げるには西洋地理学の受容と理解が不可欠です。江戸時代と地図という言葉から伊能忠敬を思い浮かべる方もいらっしゃるかと思いますが、伊能の全国測量もまた天文方の仕事です。ですが、今回は伊能には触れません。

文化4年（1807）12月、大学頭林述斎から天文方に「蛮書以て地図等仕立て申すべし」との命が下ります。高橋景保側では「文化四年丁卯冬十二月 命 臣景保等校訂万国全図」と記しています。「蛮書を以て」ですから西洋地理学上の情報を学ばなければなりません。《暦》の西洋天文学に加えて《地図》の西洋地理学です。

当時の西洋製世界地図の一例を葵文庫に蔵される貴重書『世界の四大陸を含む新地図帳』で確認してみましょう。160点ほどの地図が2冊に装丁された大型の地図帳です。アムステルダムで刊行ですが刊行年の記載はありません。最初の方に「両半球図」という形式の世界地図があります。これはこのアトラス全体のインデックス的なものです。この時期は各国が競うようにして探検を行い、地理上の発見が続いた時期で、次々と新しい地図が刊行されています。



世界の四大陸を含む新地図帳「両半球図」
（静岡県立中央図書館所蔵）

この両半球図にはニュージーランドの北島と南島間のクック海峡が描かれています。この海峡が確認されたのは1769年です。一方、オーストラリアでは、タスマニアが大陸の

陸続きに描かれています。実際にはタスマニアはバース海峡で分断された島です。この海峡は1798年になって確認されました。これらの2点からこの両半球図は1769年以降、1798年以前に制作されたことが判ります。景保が命を受けた時点からおよそ20年から35年ほど前の世界地図ということなのです。

この地図帳の『インドと中国の地図』の日本は、蝦夷地が大陸の一部とされ、蝦夷地と樺太との間のラ・ペルーズ海峡（1787年発見）が描かれていません。同じく『アジア全図』では、蝦夷地は大陸から離れますが、樺太とサハリンは別のものとされ、カラフトは大陸の半島状の陸続き、サハリンは独立した島として描かれています。

同じ地図帳の中の図でありながら蝦夷地と樺太周辺がまったく異なる姿で描かれています。幕府にとって、これは見過ごせない問題であったと思われます。この地域の正しい地図をわが国が作らない、あるいは作ることができないなら、この地域の領有やその権益を主張する根拠を失いかねない重大事です。この新地図帳は一例に過ぎませんが、当時の世界地図ではヨーロッパから到達することの困難な地域、この蝦夷地とその北方もそうした地域ですが、それらの地域の地図には誤りや混乱がありました。

新たに地図を作成するにはこの樺太・サハリン問題、すなわちこれらが同一の1島なのか異なる2島なのか。また樺太は大陸の一部か否かという問題がありました。この問題について景保は多数の地図を調査し『北夷考証』を書きます。北夷とは北蝦夷つまり樺太のことです。その中で彼が正しいと判断して採用した図は、アロースミス の地図でした。景保はアロースミスの1780年のメルカトル図法の地図と記していますが、その地図の最初の版は1790年版で1780年版は存在しません。初版を訂正した1792年版、1802年版のいずれも『北夷考証』の図と一致しません。一致するのは1808年版です。高橋景保への下命は文化4年（1807）、最新の1808年版アロースミス図を入手し、文化6年（1809）には『北夷考証』を書いたこととなります。こうして暦に始まった天文方の西洋天文学の受容・吸収は、さらに西洋地理学研究へと展開されたのです。

大学頭林述斎の命により景保ら天文方が作成した地図が『新訂万国全図』（凡例文化7年）です。まさに命のとおり「新訂」と名を付した「万国全図」であったのです。

3. 蛮書和解御用

文化8年（1811）3月、高橋景保は新たな命を受けます。「和蘭ショメールといふ書八巻を…訳生貞由をして別に此編全部を和解訳文として上るべきよしの厳命を奉ず」というものです。フランス人ノエル・ショメールが著した『日用百科事典』のオランダ語版を全文翻訳せよというものです。この『日用百科事典』はわが国での評価がたいへん高く、2冊本、4冊本、8冊本、12冊本、17冊本などの版が輸入され各所に現存しています。

景保を「蛮書和解御用」に、大槻玄沢と馬場貞由を「蛮書和解御用手伝」にこの翻訳が開始されます。そして天保11年（1840）頃までに完成した訳文が葵文庫に蔵される『厚生新編』です。全70冊（現存68冊）の大部の翻訳書です。

百科事典ですから広範な分野の項目が収録されています。この事典をつうじて各分野の蘭学者たちは多くを学び、その成果を遺しています。

オランダ語の天文学書により暦法を研究し、西洋の地理学書や地図によって世界地図を作成した天文方。語学力に加え、西洋学術を理解することのできる天文方に蛮書和解御用が置かれたのです。そしてこれが葵文庫洋書の旧蔵機関の起源となったのです。



厚生新編（静岡県立中央図書館所蔵）

4. 高橋景保の西洋への眼差し

今回のテーマは「江戸幕府の欧米への眼差し」です。今日のお話の中心人物高橋景保の眼差しが現れた言葉を紹介しておきます。先ほど取り上げた『北夷考証』の草稿『北夷考』の中の言葉です。

「…凡漢土ハ空理ヲ立、西洋ハ実利ヲ立ツ。…実利トハ何ソヤ…其物ヲ実験シテ後其理ヲ論シテ…漢土与西洋学ノ異ナルコト如此。」

この言葉から私は客観性や実証性の追求という鋭い視線一眼差しを強く感じます。この言葉に表れた眼差しは、その後のわが国の西洋学受容の基本姿勢をなすものと言ってよいでしょう。今回はこの高橋景保の言葉を借りて「幕府の眼差し」とまとめさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。